

# オリンピック・パラリンピック・ムーブメント推進校 実施報告書

【都道府県】 福岡県

【学校名】 北九州市立西小倉小学校

【テーマ】 I II **III** IV V

- I オリンピズムの教育的価値
- II おもてなし精神とボランティア
- III パラリンピックと障害者スポーツ
- IV 日本文化と異文化・国際理解
- V スポーツを楽しむ心

## 【実践研究タイトル】

障害者スポーツへの関心を高め、理解を深める体験活動を生かした学習指導方法の構築

## 【実施学年、部、講座等】

第3学年（男子65名・女子54名）

第4学年（男子59名・女子46名）

特別支援学級（男子3名・女子1名）

## 【目的・ねらい】

パラリンピック教育を推進していくために、効果的な方策を開発し、その教育的効果を検証し、授業の構築を図る。

## 【種類】(当てはまるものに○)

- ・各教科 (体育) ・道徳 ・外国語活動 ・総合的な学習の時間 ・特別活動
- ・教科以外での取組 ( )

## 【実践内容等】

(実施内容)

### 第3学年 体育科「みんなでつなごう ふうせんバレーボール」

ねらい：体育科「ネット型ゲーム」と関連させ、「ふうせんバレーボール」による特別支援学級（わかば学級）との交流学习を行うことを通して、障害がある人を含め多様な人が一緒に取り組めるスポーツを知るとともに、互いが協力してボールをつなぐ楽しさ（ふうせんバレーボールのもつ特性）を味わうことができるようにする。

学習指導計画

第1時 ふうせんバレーボールを知ろう

第2時 ふうせんバレーボールをしてみよう

第3時 ゲームをしてみよう

### 【第1時】ふうせんバレーボールを知ろう

- ・ふうせんバレーボールが「生まれた理由」についての話を聞く。

- ・ふうせんバレーボールのルールの説明を聞く。



実演を用いた説明

- ・最初にふうせんを1個割って、怖さを取り除く（割れることがあることを知る）
- ・実際にコートに入って、選手によるパス回しの師範を見る
- ・ポジションやセッター・アタッカー等の役割を知る

- ・北九州市発祥のスポーツ
- ・健常者と障害者がともに参加できるスポーツ
- ・全国大会等も行われている



スライドを用いた説明

### 【第2時】ふうせんバレーボールをしてみよう

- ・ふうせんにふれてみよう。
- ・サーブをしてみよう。
- ・パスを回して相手コートに返してみよう。



- ・チームで輪になってパスを回す（落とさずに30回等）
- ・パスの種類（片手で）  
〈オーバーパス〉（遠くの人へ）  
なるべく顔の前からパスを出す
- 〈アンダーパス〉（近くの人へ）  
お腹ぐらいのところから  
高く上げすぎない

### 【第3時】ゲームをしてみよう

- ・トーナメント形式のゲームを行う。



- ・チーム全員が1回は必ずふうせんに触る
- ・一人2回まで触れるが、続けては触れない
- ・ネットにふれると反則
- ・6回以上10回以内で相手コートに返す
- ・サーブ権は得点に関係なく、得点が入るごとに相手チームへ移動する

## 第4学年 総合的な学習の時間「だれもがかかわりあえるように」

ねらい：「だれもがかかわりあえるように」の学習展開に、パラリンピック選手との交流活動（ゴールボール体験）や英国パラリンピックCEOと交流授業を位置付けることを通して、スポーツに取り組むことによる「自分の壁を乗り越えよう」と挑戦する素晴らしさ「障害者スポーツの楽しさや難しさ」「障害者スポーツを支える思いや願い」に気付くことができるようにする。  
(ゴールボール体験学習)



競技に取り組む思いについての話



GTからの実技指導



ゴールボール体験



金メダリストとの交流

(英国パラリンピックCEOと交流授業)



英国パラリンピックについての話



英国パラリンピックCEOへの質問



英国パラリンピックCEOへのプレゼント

(実践上の工夫点、留意点等)

- ・子どもの実感的な理解を促すために、実際に競技に関わる人との直接的な交流を位置付ける。
- ・スポーツを「する(体験)」を通じた学習過程を中核に据える。
- ・現在の本校のカリキュラムとの関連を図る取組を位置付ける。
- ・スポーツを「する」「見る」「支える」という視点から、子どもにめあてをもたせ、意識を高める。

(成果)

### 第3学年 体育科「みんなでつなごう ふうせんバレーボール」

○実践後のアンケート結果からは、ふうせんバレーボールが「とても楽しい」「楽しい」と答えた子どもがほとんどであった。その理由は、「みんなとパスをつなぐことが楽しい」「わかば学級の友達とも仲良く交流できた」「助け合う大切さが分かった」という感想が多かった。「ふうせん」であることが、子どもたちのプレーへの安心感を高め、「つなぐ」楽しさを短時間で味わうことができたことが伺えた。

○わかば学級の子どもたちの動きが上達する様子を見取り、よさや頑張りを認める記述も多くあったり、昼休みに自主的に遊ぶ姿が見られたりして、交流のねらいへも近づくことができた。

### 第4学年 総合的な学習の時間「だれもがかかわりあえるように」

○ゲームを通して、視覚を失ったときの動きの難しさを実感し、「選手の凄さ」を感じている記述が多くあった。体験的な活動によって感じたことを、これまで学んだ点字などの日常生活のことと結んで感想を書く子どもも多くいた。選手やパラリンピックCEOの思いに触れ、「パラリンピックを応援したい」など、スポーツを支える視点からの記述も見られた。今後は、この実践をより充実したものとなるように、子どもの反応から得たことを基に、よりねらいを明確にした学習を構築していきたいと考える。

【オリンピック・パラリンピック教育の実施に伴う課題点】

- 教科等と関連させて、カリキュラムへの位置付けを図ること
- 障害者スポーツの教育効果に対する教職員の理解
- 講師等の活用のための費用等の確保

